



TITLE:

<研究論文>ここと居場所の不一致  
における自己・他者認識の可能性：  
ポピュラー音楽歌詞分析を通して

AUTHOR(S):

蒲生, 諒太

---

CITATION:

蒲生, 諒太. <研究論文>ここと居場所の不一致における自己・他者認識  
の可能性: ポピュラー音楽歌詞分析を通して. 教育方法の探究 2011, 14:  
56-63

ISSUE DATE:

2011-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/190375>

RIGHT:

## ここと居場所の不一致における自己・他者認識の可能性

——ポピュラー音楽歌詞分析を通して——

蒲生諒太

### 1. 問題

#### (1) ここと居場所の不一致

若者の居場所研究は、学校に馴染めない子どものオルタナティブな学習の場が生まれた頃から盛んになった(住田、2003 など)。心理学では居場所を、快感情が伴う人間関係や場所として捉える(石本、2010)。快感情を伴うという居場所は、退行や休息、遊びなどが生じる(北山、1993、p.174)「ありのままの自分を受け入れてくれる」場所(久田、2000、p.202)と考えられる。この快感情を伴う人間関係や場所という視点から、子どもたちの居場所を作る介入も考えられている。

居場所はアイデンティティとの関連でも論じられる(小沢、2003 など)。エリクソン(1973/1959)はアイデンティティを「自我のさまざまな総合方法に与えられた自己の同一と連続性が存在するという事実と、これらの総合方法が同時に他者に対して自己がもつ意味の同一と連続性を保証する働きをしているという事実の自覚」(同、p.10)とした。西平(1993)はこれを「即自的存在様式と対他存在様式とのズレをもった二重構造を、一息に摘み取った言葉」(同、p.204)であり自分自身の認識(「自分は〇〇である」)と他者の認識(「あなたは〇〇である」)というズレの生じるものが一致する感覚(sense)を伴うこと(同、p.215)と説明している。

アイデンティティと場所に関してパウマンの指摘(2007/2004)がある。ポーランドで生まれた彼は、ユダヤ人であることで祖国を追われイギリスに亡命する。彼はイギリスでアイデンティティの問題に直面し、「私がいったん『生まれながらの住処』を離れて移動を始めると、私が完全に溶け込めるような場所は存在しない……私がいたそれぞれの場所、そしてあらゆる場所が……『本来の場所と違う』」(同、p.37)と感じ

る。心理学では人間存在を位置する場所において捉える考え方が提唱されている(やまだ編、2010 など)。この考えに従うと、ポーランド人パウマンが今いる場所(ここ)イギリスはパウマンのポーランド人としての存在(ありのままの自分、本来の自分)を成立させる本来の場所ではない。彼は祖国を追われ、ポーランド人パウマンを成立させる場所(本来の場所)は失われた。このことが彼にアイデンティティの問題を突きつける。本来の場所を失うことはグローバル化が進み従来の社会制度が流動化した近代後(パウマン、2001/2000)では頻繁に考えられ、そのような人々は「根無し草」(レルフ、1999/1976)と形容される。彼らが相互作用の中で自分のエスニシティを探し出し提示することでアイデンティティを形成することもある(エリクセン、2006/2002)。この問題には本来の自分(ありのままの自分)を成り立たせる本来の場所という心理的場所と今いる場所(ここ)との不一致がみられる。

このような発想は若者の居場所にも考えられる。学校に馴染めない若者にとって学校(ここ)は本来の自分を成立させる本来の場所ではない。ここには学校で体験される不快感情(アイデンティティ感覚の喪失)が想定できる。この状況への介入として彼らにとって本来の場所づくりが提示される。居場所とは本来の自分を成り立たせる本来の場所、アイデンティティの感覚を得られる場所と考えられる。本来の場所の喪失やここと居場所の不一致は社会病理というよりも流動化した世界で生じる1つの出来事である。この出来事を心理的介入により減少させるだけではなく、この出来事を前提に私たちがどのように社会的に生きていく(自己と他者をどのように認識していく)ことができるのかという問題も歴史的变化を展望した際重要になる。興味深いことに、私たちはこの出来事を表現した

もの（ナラティブ）を歴史的文化的に蓄積しており、日常生活で触れ、そのような状況を理解し語る際に利用することができるのである。

## （２）ナラティブの行為/資源としての側面

ナラティブは人間の認識と深くかかわる概念である。心理学の定義ではナラティブは経験を有機的に組織化する（やまだ、2008）＝経験された出来事を認知的に処理する方法である。この認知プロセスは社会状況で生じる。プロセスは対話（相互作用）を通し生成され、ナラティブの意味はその文脈で判明する。語られたもの（ナラティブ）は開かれたプロセスの中で生じたもので、一個人の内部で生じ当事者の内面を反映するものではない（やまだ、2007）。また、ナラティブは行為としての側面を持つ（やまだ、2006、p.437）。語られた内容とそれを語った当事者の認知が一致しているのか、語られた内容が当事者の認知を支配するのかなど、人間の内部で生じる認知プロセスが言語的に理解できるものかについては論争があるが（金杉、2004）、ナラティブが生じた（行為された）ということは確実であり、開かれた認知プロセスでは広義の言語（やまだ、2007）は個人々人を結ぶ媒体として活躍する。

ナラティブを、経験を組織化する認知的行為として捉えた場合、その行為は身体を通じた表現行為と捉えられる。ダンスや絵画、造型、映像製作、さらには政治的な行動や学術的な講義なども含まれる。表現行為は形式化された身体運動として社会状況に提出され行為の「痕跡」が残る（口承やテキスト、絵画、録音・録画）。行為には形式・形態が存在するが（昔話研究でのプロップ、1987/1969 など）、1つのナラティブには複数の語りが引用され（バルト、1979/1968）語りの形式も複数含まれると考えられる。

私たちは文化的に蓄積された語り（表現）の形式を利用して語る（表現する）（マクレオッド、2007/1997、p.85）。ダンスのステップや絵画のモチーフ、技法、名作映画のワンシーンをオマージュした場面、偉大な政治家の演説を真似するという行為などである。これらは教科書に掲載されたものや個々の作品、他者の身体行為を観察して得られるものなどがある。表現行為を企画する参考になる、すでに行われた表現（の痕跡）をここでは物語資源と呼ぶ。物語資源はすべての行為と

その痕跡であり、教科書で定式化されたものも含まれる。私たちは文化的に参照可能な認知的行為の形式を与えられている。物語資源の論点として公共性の問題がある。物語資源として一般人の語りも有名作家の語りも同列で扱われる。しかし、後者の方が多くの人々にアクセス可能な公共的なものと考えられる。資源の公共性を考えることで私たちは、物語資源には公共性のあるものとなないもの、ある特定の人々にとって身近であっても他の人々には身近ではないものなどの特徴を論じられる。一般的な人々がアクセス可能だった資源について考える場合、大衆小説やポピュラー音楽などを人々に近いもの＝公共性のある利用しやすいものとして注目することができる。物語の資源を分析することは大きく2つの方向性が考えられる。1つは資源に含まれる形式の類型化であり、もう1つは資源から抽出された複数の形式を照らし合わせながら私たちがどのように語り表現することができるのかという技術的な問題である。後者に関しては語りの可能性についての研究であり、資源をどのように利用することができるのかという問題である。

## 2. 目的

このこと居場所の不一致は歴史的変化の中で生じる出来事である。従来はこの不一致を減少させる介入が研究されてきた。私たち（21世紀初頭の日本で生活をする人々）はこと居場所の一致/不一致を描く歌や小説、映画などに囲まれている。これらは日常的に自分の居場所について私たちが感じることを表現するのに利用可能な資源だと考えられる。本研究ではこと居場所の一致/不一致に関する物語資源から研究に適した素材を利用し、不一致がどのような自己・他者認識の可能性を持つのか、資源の利用可能性を考察する。

## 3. 方法

### （１）分析対象

分析対象には公共性の高い物語資源としてポピュラー音楽（学問的な定義として、芸術音楽、民俗音楽以外の音楽、あるいは両者における「本来の」あり方ではないものという三井、2002を採用。ポピュラー音楽研究はシェパードら編、2005など）の歌詞を選ぶ。歌詞は短く様々な解釈ができ私たちの現実を表現する上

で柔軟に利用できバリエーションが生まれやすい。歌詞は歌われるものであり記憶されやすい特徴も持つ。発表年代としては現代 J-POP の基盤形成に関わる作家が登場したニューミュージック全盛の 1970 年代後半以降のものが選ばれる。興行的に成功したものを選択したいが、CD の売り上げが落ちる一方で iTunes や YouTube などが盛んになるなど「所有」から「参照」へと音楽消費の形態が変化した時代背景を考え（井手口、2009）この点は考慮する程度とする。

本研究は、研究対象と研究者は同じ現場に参与し相互行為するという考え（やまだ、2007）、質的研究での省察性の重要（ウィリッグ、2003/2001、pp.192-208）、対象に「とまどう」から「なじむ」プロセスが調査者の疑問を産むという指摘（本山、2004）を受け、研究者が日常聴く（なじんだ）歌を研究対象として距離を置き分析（省察し）再びなじませることで疑問や発想を生み研究を生成するプロセスをとる。そのため、21 世紀初頭の日本で生きる研究者自身が聴き口ずさみ歌詞の意味を考える身近な物語資源である歌を選ぶ。

個別的にはここと居場所の一致/不一致が生じる両極端なものを比較検討のため選ぶ。また、一致/不一致の中間的な歌も選ぶ。比較検討を容易にするため歌詞に共通点がある歌を選ぶ。

以上から、ここと居場所が一致している歌―「瑠璃色の地球」、ここと居場所が不一致の歌―「NORTHERN LIGHTS」、両者の中間―「美しい星」を選んだ。

「瑠璃色の地球」（作詞：松本隆、作曲：平井夏美）は 1986 年のアルバム「SUPREME」（松田聖子）に収められている。松田聖子は 1980 年代のアイドルブームの象徴でありその後の活躍を含め影響力の高い歌手である。作詞の松本隆はニューミュージックの草分け「はっぴいえんど」のメンバーであり JPOP 黎明期から多くの歌手に歌詞提供をしている<sup>1</sup>。「NORTHERN LIGHTS」は 2002 年のアルバム「WINGS OF WINTER, SHADES OF SUMMER」（松任谷由実・作詞作曲も）に収められている。松任谷由実は JPOP 黎明期から楽曲提供及び歌手としての活躍によって音楽の教科書に登場するなど、ポピュラー音楽では歴史的に高い役割を果たしている歌手である<sup>2</sup>。「美しい星」（作詞・作曲：小西康陽）は 1998 年のアルバム「プレイボーイ プレイガール」（PIZZICATO FIVE）に収められている。PIZZICATO

FIVE（1984-2001）は、前の 2 曲に対してリスナーの範囲は限られるが日本ポピュラー音楽史では「渋谷系サウンド」の代表とされ、世界的にも評価されたグループである。3 曲ともにメジャーな流通ルートから広まったものでポピュラー音楽史上重要な作家・歌手による歌として公共性を持つものと考えられる。

## （2）分析方法

この 3 曲には共通点として、ここ（地球）とここではない場所（宇宙）との対比が見られる。また、3 曲ともに自分が今いるここは地球だが、居場所（本来の場所）は地球と宇宙の 2 つの場所のどちらかに分かれる。分析では、語り手の居場所はどこでどのように語られるのか、他者の居場所はどこでどのように語られるのかの 2 点に注意する。

## 4. 結果

### （1）「瑠璃色の地球」の分析

夜明けの来ない夜は無いさ  
あなたがボツリ言う  
燈台の立つ岬で 暗い海を見ていた  
悩んだ日もある 哀しみに  
くじけそうな時も  
あなたがそこにいたから  
生きて来られた  
朝陽が水平線から 光の矢を放ち  
二人を包んでゆく  
瑠璃色の地球  
泣き顔が微笑みに変わる  
瞬間の涙を 世界中の人たちに  
そっとわけてあげたい  
争って傷つけあったり 人は弱いものね  
だけど愛する力も きっとあるはず  
ガラスの海の向こうには  
広がりゆく銀河  
地球という名の船の 誰もが旅人  
ひとつしかない  
私たちの星を守りたい

岬で語り手は「あなた」と夜明けを待っている。水平線から朝陽が上ってくる。語り手は「あなたがそこにいたから」自分は「生きて来られた」と思う。「光の矢」のような朝陽は岬にいる 2 人を包んでいく。夜明けを「あなた」と眺めながら語り手は自分と「あなた」、「世界中の人たち」のことを考える。海がガラスのように透き通り、空が「銀河」であることに気づくと自分や「あなた」、「世界中の人々」は同じ「地球という

名の船」に乗る「旅人」であると知る。

語り手と「あなた」、「世界中の人たち」が暮らすここ＝地球とそれを照らす太陽がある「ガラスの海の向こう」にある「銀河」というここではない場所の2つの世界が描かれている。「ガラスの海」という表現は「ガラスの地球を救え!」(1989)という手塚治虫の随筆集タイトルと呼応する。ここではない場所＝この地球が浮かぶ宇宙は地球を包む光を放つ太陽のある場所、地球が1つの場所であると「私たち」に気づかせ、ここ＝地球の美しさを引き立てる照明装置のような場所である。手塚の随筆集でも「宇宙」との対比によって「ガラスのように壊れやすく、美しい地球」(同、p.173)への気づきが生じる。語りは個人的なもの(悩む語り手を「あなた」が支えてくれたから「生きてこられた」こと)から「世界中の人々」、「人間」についてのもの(「泣き顔が微笑みに変わる瞬間の涙を」「世界中の人たち」と共有したい、「人」は争うこともあるが愛する力もある)へと移る。最初は語り手と「あなた」が同じ場所では一体化する視点が提示され、「世界中の人たち」や「人間」にまでまなざしが拡大され、「私たち」(語り手と他者)は同じ居場所を持つ一体であるという視点に移行している。「旅人」という表現は個人々が孤独であるのではなく、同じ「宇宙船地球号」(フラニー、1985/1968)の乗組員という発想である。人間は同じ船の乗組員であるからこそ「ひとつしかない 私たちの星を守りたい」という語りへ結びつく。

## (2)「美しい星」の分析

窓の外 光るのはビルの灯り  
いつか見た夜空の星に似てる 少し似てる  
思い違いしてなければ 子供の頃  
ひとりきりパパもママもいないとき  
夜の星を見上げてたら 吸い込まれて  
空を飛んだ  
窓の外 見えるのは夜の闇  
なつかしいきみの声が聴きたくなる  
思い違いしてなければ きみとはじめて  
逢った夜は星がたくさん出ていたね  
美しい星に住む美しい人々  
美しくて遠い星のなつかしい人々  
いつかぼくを想い出して

「ぼく」は窓辺にいて、「ビルの灯り」や「夜の闇」をみている。ビルの灯りは「夜空の星」に似ていて、子供の頃、星空を飛んだことを思い出す。出会った夜

の星空を思い「夜の闇」に「きみ」の声が聴きたくなる。思い出を語りながら、「ぼく」は突然、「美しい星に住む美しい人々」「美しくて遠い星のなつかしい人々」へ「いつかぼくを想い出して」と呼びかける。

突然の呼びかけは死と浮上という2つのイメージから解釈ができる。この2つのイメージはアルバムの前曲「華麗なる招待」から引き継がれる。そこでは語り手は自分が死ぬ夢を見る。けれど、本当に自分が死んでしまっても「きみ」にこの世界で出会えたから「悲しくない」。人生はあつけないけど繰り返すもので「飛行機で見る短い映画みたい」だと語る。ここで死と浮上＝飛行機というイメージが提示されている。

これらのイメージから「美しい星」を解釈する。「ぼく」はここ＝地球、地上から浮上しここではない場所へと移っている。浮上によって最初は「ビルの灯り」、そして「夜の闇」と見えている景色は変わる。浮上をあの世(ここではない場所)へと移動するイメージ(やまだ、2010、pp.100-104)として捉えるとそれは死を暗示する。「ぼく」は「子供の頃」浮上の感覚(夜の星に吸い込まれ空を飛ぶ)を経験している。それは死の感覚＝この世界とは別の世界へのアクセスと捉えられる。星空はこの世界と別世界との中間点を表す。浮上＝死は生物学的な死だけではなくここからここではない場所への移動によるここにいる自分の死という心理的なものとも考えられる。「美しい星」への呼びかけは、ここから離れる「ぼく」が「遠い星」へとになっていくここ地球にいる人々(地球が居場所の他者。「パパ」「ママ」「きみ」)への呼びかけである。

浮上に宇宙船のイメージが重なる。浮上は「窓」越しに語られ、浮上していく描写が続く。「ぼく」が宇宙船でここ＝地球から離れるイメージを想起させる。死と浮上＝宇宙船という2つのイメージは「ぼく」が生者から死者へと変化する者と宇宙人であるという2つの可能性を示す。前者は場所によって存在の捉え方が変化するが後者は変化しない。この世にいる＝生者/あの世にいる＝死者と場所によって存在が変化するのに対して、地球にいる＝宇宙人/宇宙にいる＝宇宙人と場所によっても存在が変化しない。宇宙人という捉え方に立ったとき、ここと居場所の不一致が生じる(本研究ではこの解釈を採用)。「ぼく」が宇宙人であるなら、「ぼく」にとって地球は旅先や仮住まいである。す

ると「ぼく」の居場所はここではない場所＝宇宙となる。「ぼく」が地球人ではない疑惑が生じるのは語り手が子供の頃にこの世界とこの世界ではない世界を行き来していたという出来事による。この出来事によって語り手は異形の人（人間ではない存在）である可能性が示唆される。ただし、「ぼく」は「美しい星の人々」に「想い出して」と呼びかけ、異形の人でも地球での生活に愛着を感じていたことが示される。

### (3) 「NORTHERN LIGHTS」の分析

糸杉たちは 空を指さし  
まだ見ぬ未来 教えているの  
Glorious はじめて出会ったきみの瞳に  
All my previous 哀しすぎる二人の  
運命の道しるべが 蒼い闇照らしてた  
オーロラの舞う平原  
手に手を取り 走りだせば  
ふるさとの遠い星まですぐ  
群れにはぐれた トナカイのように  
鈴を鳴らして 愛を探した  
Glorious 何に身を隠したとしても  
All my previous きみに会おうと信じてた  
永い時の涯てへ 今夜帰ってゆこう  
ポーラースター浮かぶ天空  
船に乗って 飛んでゆけば  
二人が来た星まですぐ  
見えない もう何も見えない  
オーロラの舞う平原  
手に手を取り 走り出せば  
ふるさとの遠い星まですぐ

語り手は北極星の浮かぶ「天空」、「オーロラの舞う平原」に「ふるさとの遠い星」を見る。語り手は、遠く星で生まれこの地球にやってきた同じ境遇の相手と運命的な出会いを果たすと考えている。2人は人間という仮の姿に「身を隠し」ている。運命の相手である「きみ」に出会い、「オーロラの舞う平原」に船＝宇宙船を出して「ふるさとの遠い星」に「手と手を取り」走り出そうと呼びかける。2人の運命を暗示する糸杉は「空を 指さし」「青い闇」を照らす。

語り手は自分がここにいるべき存在（地球人）ではないと気づいている。同じ境遇にいる「きみ」を探し見つけることで本来の場所（居場所）へと帰ることができると考えている。「二人」は地球人の姿をしているが「身を隠した」仮の姿である。彼ら（語り手と他者）にとって居場所はここではない場所「ふるさとの遠い星」であり、この地球は運命の人と離れ離れになった

地である。ここ＝地球はここではない場所＝ふるさとの星を照らし出す装置であり、離れ離れになった「きみ」を探す受難の地から約束の地である「ふるさとの遠い星」への運命の成就が希求される。「美しい星」で「ぼく」の宇宙人的な側面を示したが、ここでは明確に語り手自身が私は宇宙人であると示している。語り手は不思議な力を持っており、糸杉が空に向かって伸びているのを「未来」を教えるものであると読み取ったり、「はじめて出会ったきみの瞳に」自分たちの運命を気づいたりする。語り手は「オーロラの舞う平原」を「ふるさとの星」に帰るための「船」が進む「海（の平原）」であると語ることで「浮上」のイメージを提示する。語り手にとって空はこの地球と本来の場所をつなぐパスの役目を持つ。しかし、彼らが宇宙へ向かう描写はなく語り手の思いが語られているにすぎない。この地球から「ふるさとの遠い星」を思い「きみ」に帰ろうと呼びかけるしかできない。

### (4) まとめ

ここまでの分析では、すべてで語り手のいる場所（ここ）は地球である。しかしいくつかの違いもある。「瑠璃色の地球」と「NORTHERN LIGHTS」は語り手と登場する他者の居場所が同じである。だが、居場所そのものやことここではない場所の対比による効果は異なっている。「瑠璃色の地球」は地球が語り手と他者の居場所であり、ここではない場所宇宙は語り手と他者の居場所であるここ地球を美しくする機能を持つ。

「NORTHERN LIGHTS」は地球ではない場所宇宙が語り手と他者の居場所であり、ここ地球は両者の居場所であるここではない場所宇宙を照らし出す機能を持つ。

「美しい星」では語り手と他者の居場所にギャップが生じる。「美しい星」がこと居場所の不一致した語りなら、語り手が宇宙人（居場所はここではない宇宙）で他者は地球人（居場所はここ地球）であると考えられる。それは語り手が体験した不思議な出来事とそれを可能にした力から生まれる疑念である。語り手の不思議な力は「NORTHERN LIGHTS」にも見られる。

「美しい星」と「NORTHERN LIGHTS」の共通する部分として、語り手が異形の人の可能性がある。ここでの異形の人とは人間や地球人ではない存在（宇宙人）のことを指す。さらに両者に共通することはここでは

ない場所が、自分が向かい、向かおうとする場所であることである。「瑠璃色の地球」ではここではない場所宇宙に語り手が行くという語りはない。宇宙は今語り手がいる場所を照らすものであつて場所というよりも外部である。「美しい星」「NORTHERN LIGHTS」のここではない場所は異郷（異なる世界、場所）である。

以上の分析を通じて得られた「異形」と「異郷」の問題がどのようにこの不一致と関係しているのかさらに考察したい。その際、ここと居場所が不一致である状況を異形と異郷という観点からすでに検討している「竹取物語」研究を利用する。

## 5. 考察

### （1）異形＝異郷の人——竹取物語

「竹取物語」（上坂訳注、1978）では竹にいた稚児かぐや姫が竹取の翁によって美しい女性として育てられる。彼女には5人の求婚者が現れるが婚姻の条件として難題をつきつけ退き、朝廷への出仕も断る。自分が「月の都」の人間であること、罪を犯し地上で償っていたことを明らかにして天上の世界へと帰っていく。かぐや姫はここ（地球）と居場所（月の都）の不一致を抱えた存在である。竹取物語には様々な物語類型が考えられ、折口信夫以来の「貴種流離譚」、他に竹取翁伝承、異常出生譚、致富長者譚、求婚難題譚、天人女房譚（関根、2005）などが指摘されている。

「異常出生譚」（通常出生と異なる異常出生を遂げた人物が登場する物語）という指摘からも分かるが、かぐや姫の出生（竹から生まれ短期間で成長）は異常である。翁は求婚を拒むかぐや姫に「変化の人といふとも、女の身持ち給へり」と言う。かぐや姫は仏のような超人的なものが形を変えた存在であっても女としての身体を持っているのだから求婚を拒むことはないという。翁はかぐや姫が月の都の住人であると告白する前から彼女が「異形の人」であると気づいている。

「竹取物語」は天人女房譚（天人が地上に降りてきて何らかの理由で地上に住み天上に帰ったり神として祀られたりする）でもある。この話には人間ではない異形の人＝この世界の人ではない人がこの世界に存在しているという意識（気づき）がある。この世界の人ではない人間をその人が位置する場所で考えるという発想が、それではこの人はどの世界（異郷）の存在で

あるのかという問いを生む。

この問いによって「異形の人」と「異郷の人」がつながり、かぐや姫の居場所である「月の都」という異郷の存在に焦点が当たる。文学や民俗学での「異郷」は「海の水平線のうらがわに在ると信じられた理想郷（竜宮）や、地底の国、天上の他界など広く意味」（藤井、1975、p.398）する。本研究で異郷はここでない場所という広い範囲で理解する。「竹取物語」では藤井が指摘するように（藤井、1978）異郷の姿は描かれない。異郷という物理的な空間が存在しなくても（竹取物語のように月へと帰る様子は描かれているものの）「竹取物語」は語りえる。異郷は単にここではない場所のことを指している心理学的場所としても理解できる。

かぐや姫は異形＝異郷の人であり、ここ＝地球にいるがここは彼女の居場所ではない。この不一致がかぐや姫と地球人に心理的距離を生じさせる。5人の求婚者のうち、最後の石上中納言は「燕の子安石」を探す中で命を落とすがここで彼女は「少しあはれ」と同情する。藤井（1975）は彼女からこのような地上人への同情を引き出すために求婚譚は続いたと考える。

「竹取物語」研究から異形の人と異郷の人がつながることが分かった。この点から3つの曲（とくに「美しい星」、「NORTHERN LIGHTS」）の分析結果をみる。「瑠璃色の地球」で語り手は地球人であると強調される。「美しい星」「NORTHERN LIGHTS」で語り手は地球人ではない異形の人であることが示されている。これは語り上でのことで語り手が本当に異形の人である必要はない。2つの歌では「異郷」の存在も示唆される。それはここではない場所宇宙である。異形の語り手はここ地球が居場所である人々＝地球人と心理的距離がある。「美しい星」ではこの距離が縮まるが、最終的にここ地球＝居場所ではない場所を離れることでその距離は決定的なものになる。一方、「NORTHERN LIGHTS」で登場する他者、語り手と同様に異形の人である「きみ」との心理的距離はほとんどない。

以上の考察をまとめる。自分自身の（ここにいる他者と比べて）異常な特徴に気づくことで自分は異形の人であると語れる。異形の人はこの人ではないから異形の人＝異郷が生まれる。これは実際に存在しなくてもいい。その場所は異形＝異郷の人の居場所である。これによりここと居場所に不一致が生じる。

異形の人という気づき（他者と自己の不一致）、異郷の人という気づき（ここと居場所の不一致）、どちらが先に生じ他方の気づきを誘発するのかは分からない。異形＝異郷の人とここに住む人々との間には心理的距離があり触れ合いにより距離は縮むものの埋められず、本来の場所に帰るときそれは決定的になる。その一方で自分と同じような異形＝異郷の人（ここと居場所が不一致の人）との心理的距離はほとんどなく、彼らは自分とともに本来の場所に帰るべき存在と考えられる。

## （２）不一致が生む他者肯定の可能性

本研究での異形＝異郷の人とは冒頭で示した本来の場所を失い本来の場所とは違う場所を生きる現代のある人々である。異形の人とは自分に他者とは異なる特徴を見出しその特徴を持った人々のいる異郷を探す。彼らは周囲の人と心理的距離を持ち孤立し心理的に不適応な状況に陥りやすいかもしれない。

３つの歌の分析によりここと居場所の一致/不一致が生む自己・他者認識の可能性が示された。「瑠璃色の地球」で示されたのはここと居場所の一致から生じる宇宙船地球号的発想である。この発想には個々のアイデンティティを超えた視点が見られそうだが、他者が自己と一体化されることで他者という存在が喪失している。他方「NORTHERN LIGHTS」で示されたのはこの不一致の中で同じ境遇の人との運命という強い心理的つながりを持つ発想である。「瑠璃色の地球」とは正反対であるが、「きみ」という他者を自分と同じ境遇として一体化し、個人としての尊厳や選択への配慮が失われている。これらの発想が直ちに危険な発想であるとはいえないが、所属集団の絶対化（集団外の他者の排除、否定）やその集団内での他者の喪失など自民族中心主義や全体主義に通じる発想の可能性が含まれ、エリクソンが「擬似一種化」（pseudo-speciation）として危惧したもの（エリクソン、1981/1977、p.82）、それを超えるために想定されたが到達してはいけない「理念」としての「種としての人類」全体を包括するアイデンティティ（西平、1993、pp.245-247）が見られる。

それに対し「美しい星」での異なる居場所を持つ人々との距離を置いた交流とそこで生じた他者を「美しい」と肯定できる発想は注目される。この発想は、ここは本来の場所ではないが快感情が生じる居場所であり、

ここにいる人たちは他者であるが否定されるのではなく重要な存在であるというものである。本研究では快感情が生じる「居場所」と「本来の場所」を一体と考えていたが、「美しい星」では異なるものと考えられる。

このようにここと居場所をめぐる歌詞分析を通じ、その一致/不一致が持つ自己・他者認識の可能性が示された。一致/不一致ともに全体主義や自民族中心主義へつながるネガティブな発想の可能性が存在した。ここと居場所の不一致が社会病理として捉えられる点を考えると、不一致は介入され是正されるべき対象かもしれない。しかし、不一致を歌った「美しい星」でのここにいる人々と自分との心理的距離を近づけることで本来の場所ではないここを居場所として感じられるという発想、心理的距離が（近づいてもここが本来の場所ではないために）埋められないことで他者が喪失されない発想は、一致/不一致双方に見られたネガティブな発想を超えていく可能性を示していると考えられる。この点から歴史的変化で生じるここと居場所の不一致に関して、それが持つ自己・他者認識のポジティブな可能性が示されたと考えられる。ただ今回の研究では認識行為の可能性を示したのみである。実際のこのような認識が生じさせる主体となる人間、その人間を囲む社会状況によってはこのポジティブな可能性も行為として遂行できないかもしれない点、この行為の主体や他者にネガティブな影響（効果）を状況によっては与えてしまう点も検討しないといけない。

## 引用文献

- バルト、ロラン（1979/1968）作者の死、花輪光訳（物語の構造分析、pp.79-89） みすず書房
- バウマン、ジグムント（2001/2000）リキッド・モダリティ、大月書店
- バウマン、ジグムント（2007/2004）アイデンティティ、日本経済評論社
- エリクソン、エリック、H（1973/1959）自我同一性、誠信書房
- エリクソン、エリック、H（1981/1977）玩具と理性——経験の儀式化の諸段階、みすず書房
- エリクセン、トーマス、ヒランド（2006/2002）エスニシティとナショナリズム——人類学的視点から、明石書店



フラー、バックミンスター (1985/1968) 宇宙船「地球号」操縦マニュアル、東野芳明訳、西北社

藤井貞和 (1975) 異郷論、(三谷栄一編、鑑賞 日本古典文学 第6巻竹取物語・宇津保物語、所収) 角川書店

藤井貞和 (1978) 物語の神話構造——<異郷>論ふう  
に、(深層の古代——文学史的批評、所収)、国文社

久田邦明 (2000) 子どもと若者の居場所——大人に  
期待される役割、(久田邦明編、子どもと若者の  
居場所、pp.202-227) 萌文社

石本雄真 (2010) 青年期の居場所感が心理的適応、  
学校適応に与える影響、(発達心理学研究 21 (3)、  
pp.278-286)

井手口彰典 (2009) ネットワーク・ミュージッキン  
グ——「参照の時代」の音楽文化 (双書 音楽文化  
の現在 3) 勁草書房

金杉武司 (2004) フォークサイコロジーと消去主義、  
(心の哲学I 人間篇、pp.179-219) 勁草書房

北山修 (1993) 自分と居場所 (北山修著作集・第3  
巻)、岩崎学術出版社

マクレオッド、ジョン (2007/1997) 物語りとしての  
心理療法——ナラティブ・セラピーの魅力、野村晴  
夫訳、誠信書房

三井徹 (2002) ポピュラー音楽研究の理論と方法、  
(民俗音楽学の課題と方法——音楽研究の未来を  
さぐる、pp.77-94) 世界思想社

本山方子 (2004) 現場から問題を生成する、(無藤  
隆ら編、ワードマップ 質的心理学——創造的に活  
用するコツ、所収) 新曜社

西平直 (1993) エリクソンの人間学、東京大学出版会

小沢一仁 (2003) 居場所を得ることから自らのアイデ  
ンティティをもつこと、(東京工芸大学工学部紀要  
26 (2)、pp.64-75)

ブロップ、ウラジーミル (1987/1969) 昔話の形態学、  
白馬書房

レルフ、エドワード (1999/1976) 場所の現象学——  
没場所性を超えて、ちくま学芸文庫

関根賢司 (2005) 竹取物語——神話/系譜学、おう  
ふう

シェパード、ジョンら編 (2005) ポピュラー・ミ  
ュージック・スタディーズ——人社会学の最前線、三井

徹編訳、音楽之友社

住田正樹 (2003) 子どもたちの「居場所」と対人的  
世界、(住田正樹、南博文編、子どもたちの「居  
場所」と対人的世界の現在、pp.3-17) 九州大学出  
版会

手塚治虫 (1989) ガラスの地球を救え——21世紀の  
君たちへ、光文社

上坂信男訳注 (1978) 竹取物語、講談社学術文庫

ウィリッグ、カーラ (2003/2001) 心理学のための質  
的研究法入門——創造的な探求に向けて、培風館

やまだようこ (2006) 質的心理学とナラティブ研究  
の基礎概念——ナラティブ・ターンと物語的自己、  
(心理学評論 (49-3)、pp.416-463)

やまだようこ (2007) ナラティブ研究、(やまだ編、  
質的心理学の方法——語りをきく、pp.54-71) 新  
曜社

やまだようこ (2008) 喪失を生きるナラティブ「千  
の風になって」、(やまだ編、質的心理学講座2 人  
生と病いの語り、pp.15-50) 東京大学出版会

やまだようこ (2010) この世とあの世の位置関係—  
—日本のイメージ画 1 をもとに、(やまだ編、こ  
の世とあの世のイメージ——描画のフォーク心理  
学、pp.97-148) 新曜社

「瑠璃色の地球」(JASRAC 作品コード: 094-4533-1)  
松本隆作詞/平井夏美作曲/サンミュージック出版  
「美しい星」(061-1283-8) 小西康陽: 作詞/小西康陽:  
作曲/コロムビアソングス株式会社  
「華麗なる招待」(061-1281-1) 小西康陽: 作詞/小西  
康陽: 作曲/コロムビアソングス株式会社  
「NORTHERN LIGHTS」(105-5374-6) 松任谷由実:  
作詞/松任谷由実: 作曲/雲母音楽出版

※本文掲載歌詞は繰り返し部分を省略

注

<sup>1</sup> 「瑠璃色の地球」は合唱曲としても親しまれ学校教育  
を通じて公共性は高められている。

<sup>2</sup> 松任谷由実についても音楽の教科書に掲載され注1  
と同様、学校教育を通じて公共性は高められている。  
2002年、『高校生の音楽1』、音楽之友社。

(修士課程)